クレジット:
UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 黒住 真

ライセンス:
利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限って、特に記載のない限り、クリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下で利用することができます。
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

BY NC ND

漢文と和文の世界観

黒住 真(Kurozumi Makoto)

近世から近代への変化——四書五経と古事記　2016　7/6　16:50-18:35

グローバル化による変化——国を超えた古典　2016　7/13　16:50-18:35

学術俯瞰講義 古典は語りかける 2016 年度Ｓセメスター第 12 回
駒場 21 KOMCEE レクチャーホール

『古典』の形成は、根底的な言葉による世界観の構築になっている場合が多いです。日本では、その言葉が、漢語と和語と両方が結び付いており、時代や社会によって、両者の関係や位置を変化させる、という歴史があります。その世界観の大きな構築は、とくに近世といわれる江戸時代に形づくられ、それがまた近代といわれる明治維新以後に、国内的に位置付き、使用される歴史をもちました。しかしまた 20 世紀末になると、グローバル化による変化もあります。そこにはどんな歴史があり、今後何が発生するのか。漢文と和文の世界観が日本においてどのように形成され変化していくのか、その意味を捉え考えてみます。

０．問題の大掴みな把握とその思考

古典は語りかける　小島毅・谷口洋
ギリシャの文学と哲学
　『オデュッセイア』を読む：ヒュプリス！ どっちか　葛西康徳
　ソクラテスという「哲学者」の誕生　納富信留
中国の文学と哲学
　『屈原』とは何者か　谷口洋
　論語を読む、論語に学ぶ　小島毅
日本の文学と哲学
　『徒然草』の〈貧〉と〈閑〉の思想　藤原克己
　漢文と和文の世界観　黒住真
　　↓
ヒュプリス(hubris)ではない：哲学(philosophy)、文学（literature）、言語（language）、古典(classic)、思想（thought, idea）、世界観(Weltanschauung, worldview)
　　↑
「大学」は、認知の運動。大学の中身は、売れればいい、勝てばいいのではない。たとえ勝ち負けとどこか関わるとしても、情動と結びつくとしても、根本的には真理に向けての思考の運動。
　哲学者：ガダマー（1900-2002）『真理と方法』1960,訳1986-2012.
理科系は、実験と証明による。文科系は、人間が含まれた具体的な物事や世界、その形成態を捉える。
個々に専門化・分断化もするが、総体にもなる（文化、文明）。
理科系の中身は、最終的には文科系の中身と結びつく。その両者の相互関係が大事である。→「総合文化」
　　↓
その認知は、ヒュプリスならぬ真理に向かう動力をもって、どのような世界観で位置付き・働き展開するのか。
「思想史」（Intellectual History / History of Ideas）という方法をここでは用いる。

１．「前近代」日本における世界観の組立て・大体の仕組み

(1)風土の三形態

「風土」＝(自然に近接する)生活の形成様式の型、≠自然(そのもの)。 和辻哲郎(1889-1960)
→「気質」・エートス論には繋がる。**文献：**和辻哲郎『風土—人間學的考察』1935 年 →岩波文庫 青 33-144

	要素	人への意味	人の態度	人の優勢機能	宗教
ﾓﾝｽｰﾝ的	湿潤(＋熱)	生命の充溢と混沌	甘えと忍従(怨み)	情	恵み・愛の神
沙漠的	乾燥	死/無の脅威と生の獲得	対抗と服従	意	裁き・義の神
牧場的	湿と乾の中	「形」の獲得	制御と把握	知	キリスト教

↑ﾓﾝｽｰﾝ：東アジア・南アジア、　沙漠：中東・内陸、　牧場：西欧
→活物観（vitalism）　概念としての理・気における気の根底性。　西洋における理の重視。

(2)モンスーン文化・島国における日本

・中国・インドと日本

時間	インド・南アジア	持続	瞬間・その都度の充実、移り行き　→執拗を忌む日本
空間	中国	粗大・悠々	細やか・小ささ・集中・敏感・こせこせ ＃日本の思想・文化の視点の細かさ・集中

cf. 李御寧『縮み志向の日本人』講談社文庫、1984
Smaller Is Better: Japan's Mastery of the Miniature, O-Young Lee, (1984) Kodansha

・中国における、大きさ・内部勝手さ。個々の関係の重要・広がり。→中華、天地への広がり。
・日本における、秩序・組織形成の速さ・深さ。組織内外の重要。　組織内での死・他組織での生。
思想・文化において、具体的だが形而上学的なもの、天地や大きな宇宙観への関わりが中韓より少ない。

・「島国」における外部依存傾向と内部持続・自足・集中による開閉・交流

大陸〔文化大産地〕と海との関連でみると：

a 大陸型	……中国・米国	自尊・大きなひとつの中心世界、関係による拡大
b 半島・陸島型	…朝鮮……	大陸(文化)等との緊張。→原理主義・理想主義。
c 近洋島国型	……日本	〃　＝α外部の受容と距離・β(内的)自足

・外界への依存・受容における組成とまず輸入、後に輸出という傾向
‖
・**和辻哲郎「日本精神」**1935頃〔→『続日本精神史研究』→和辻哲郎全集４〕
α「外国崇拝、外に対して己を空しくする姿勢」(受容性)
β「さなぎの変態のような形態をしている」→「重層性、並在nebeneinander」
(内的持続性・保守保全性)　(徹底“否定”の少なさ)
↓
階級、衣食住、宗教、芸術、思想、経済、政治……における重層性。Syncretism(習合)

(3)周辺・断片を懐きながら形成される日本での二元的秩序

・貴族制を中心・持続化した階級の変化と編成替え――豪族、摂関家、上皇……(→公家)、鎌倉室町江戸幕府(公家)、華族、
cf. ×王朝交替（革命)。言語、儒仏等の習合関係。
・外部への依存――客人神（まれびと神）折口信夫（1887-1953）　ex. 衣食住の例 外部依存的習合
・原神道――万物の神や自然への信仰を背景に
・縄文、弥生文化のシャマニズム、断片からの、大抵は、東アジア、さらには地球上の何かに関係。
↓
・〔組み立て・国へ〕二元的な構成――先立つ「神懸り」と、その「解するもの」「現実秩序化するもの」：
「卑弥呼…鬼道を事とし、能く衆を惑はす、年己に長大にして、夫壻無し、男弟ありて、国を佐け治む」(『魏志』)
卑弥呼による神懸り（交霊)「まつり」と「さには」による解釈(審神)
↓
女治から男治へ。→天皇（男系）と大臣（おおきみ)・大連（おおむらじ）etc　→公武、文武、天皇将軍
メタモルフォーゼ（変態・変身）におけるミメーシス（模倣）とエクスタシス（浄化）
・武家系統はスサノヲに、天皇・公家系統はヒミコ・アマテラスに繋がって展開する傾向。
・言語における漢文と和文(cf. ラテン語と国語)。漢文が表立ってあるが和文は内的で持続展開する。
漢文が政治・社会に関与し〔→中世以後武家〕、和文が宗教・芸能に関与し〔→天皇・公家〕、傾向が流れる。
日本書紀と古事記。前者が表立った中心として記録され、後者は秘伝的で近世中期にやがて公開される。
・**外部依存性のもとでの**、生活社会政治軍事等の構築に向かう形成系と、中心的な「通路としての」天皇系。
→諸伝統の残存、並在、→　日本の思想・文化・言語等の複数性・多元性
和辻哲郎「続日本精神史」、並在重層論、「通路」天皇論。「権威と権力」論。空論で思想史を捉える。
・根底に強いプレ・アニミズム（活物観）がある。

○把握史・研究史

・石井良助『天皇―天皇の生成および不親政の伝統』山川出版社、1982.8（『天皇―天皇統治の史的解明』1950）
・ベン＝アミー シロニー著、大谷堅志郎訳『母なる天皇―女性的君主制の過去・現在・未来』講談社、2003.01、Ben Ami Shillony The Enigma of the Emperors:Divinity and Gender in the Japanese Monarchy,未刊。
・石田一良、神道――生命観の心情・態度をベースに、外来思想を「着せ替え人情」説
・西田長男『神々の原影』三橋健共著　平河出版社 1983
・河合隼雄『中空構造日本の深層』中公叢書 1982

２．中世から近世への秘跡的動向

・通常の文学史については、『徒然草』の〈貧〉と〈閑〉の思想（藤原克己）など参照。
・政治・秩序に関わる神道における動向の中心的一端として

伊勢［外宮］（豊受大神宮）　　京都　　江戸　　会津

度会行忠（1236-1306）神道五部書

度会 家行（1256-1351）『類聚神祇本源』『神道概要』『神祇秘抄』

日本・中国、神道・仏教・道教その他に及び、神宮の創始を神道の本義を説く

吉田兼倶（1435-1511）・清原宣賢

京都に 1484 年、社・宮を建立、さらに活動。
（1665 寛永 5 には幕府より全国神社の神職の任命権［神道裁許状］を与えられる）
卜部家を継承、家学・言説を整理し、経典『神明三元五大伝神妙経』などを顕わす。
『唯一神道名法要集』　卜部兼延の著作と擬す。　さらに『神道大意』や注釈書等

林羅山（1583-1657）「朱子学」と「神道」
梵舜・賢従　　『本朝神社考』『神道伝授』
滋賀：中江藤樹（1608-1648）

度会延佳（1615-1690）

←←←→→ **吉川惟足**（1616-1695）『神道大意註』

←←←←←←←←**山崎闇斎**（1619-1682）←←→→

・吉田神道は幕府からの神社の全国的支配に結び付くが、公家との関係が薄く十分であったとはいえない。
・山崎闇斎は、一方で「朱子学」を最も感得し、他方で「神道」の秘伝をも広く感得。
・漢文を中心にして和の秩序を結び付け立ち上げていった。ただし、公開は朱子学だけ。

３．近世における公共―世俗化・祖先化

(1) 戦時期からの「喧嘩両成敗」

刀狩り　　→徳川の平和（Pax Tokugawana）
多くは肉食をしない（魚は食べる）
力をものの上昇・敬い→祖先崇拝の拡大
↓

(2)日本社会における神・儒・仏の習合

Cf.尾藤正英「日本における国民的宗教の成立」『江戸時代とはなにか―日本史上の近世と近代』1992
・制度：　神――鎮守や氏神氏子制
仏――寺請制・檀家制家々における、神棚・仏壇　　制度として 1660 年頃、
↓

(3)生命観・活物観、生敬いの観を背景としての「天」と「威力」

ｐ神道（神信仰）：生殖や豊饒、生の成長・増進、宮参り、成人式、収穫祭等などの寿ぎ

q 仏教：死および霊威・凶事の鎮め〔葬儀・祈祷〕慰撫・救霊・成仏・往生
r 儒学：漢学、外来語による文化価値。後天的・人為的な社会形成、教育・学芸、処世・治世
x 邪神・基

・対抗的 x をもつことにおいて、近世的統一を形づくる。しかし x は外化される物語化。

仏 ←ー儒 ←ー神
│　　│　　祖霊：死自体がない、基の側からの「偶像」
└→→→→→┘　　怨親平等、水子、間引き、供養、往生
基　　文学における「怪談」　天草四郎・「歌舞伎」

・「威力」「武威」←渡辺浩『日本政治思想史：十七～十九世紀』2010
・「天」の元での←「非理法権天」←瀧川政次郎（たきかわ・まさじろう、1897-1992）同名著 1964

(4) 科挙が無いため学問・組合

・武家秩序下ではあったが、学問的に自由な町人・医者たちやその先祖たちによる学問の展開。
・講（組合）、富士信仰などの、民間義礼。

(5)傾向としての「聖」等への畏敬（×持敬）、「古学」へ。

・天地、聖はどのように位置付くのか。

4．朱子学の主張―天地観を背景にして

(1)［各テキストの構造］天地観から

易・書・詩・礼記・春秋　（五経）┐
↓　　├→宋学・朱子学
大学・中庸＋論語・孟子　（四書）┘　　→四書五経

(2)「易」の各図と構成

「易に太極あり、これ両儀を生じ、両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず」（易有太極 是生両儀 兩儀生四象 四象生八卦 八卦定吉凶 吉凶生大業）繫辞上伝

四象（しょう）　四時(春夏秋冬)、五行(木火土金水)　：朱子による分類

卦（け）［三爻の組み合わせ］→八卦　←卦辞（けじ）
［六爻の組み合わせ］→六十四卦

八卦（はっけ）（乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤）　：宋以来、先天図・後天図

六十四卦（ろくじゅうしけ）、十翼（じゅうよく）：彖伝（たんでん）上下、象伝（しょうでん）上下、繫辞伝（けいじでん）上下、文言伝（ぶんげんでん）、　説卦伝（せつかでん）、序卦伝（じょかでん）、雑卦伝（ざつかでん）
（春秋・論語に近い）　（中庸・孟子に似る戦国期）　（漢初か）
↑
・宋代論者・朱熹はより後のテキストを用いさらに図形を見て筮竹を用いながら物事を論理的に組み立てる。

(3)『太極図説解』『周易本義』等による立論と朱熹の位置

①詳細・更なる図形と立論の詳細は『周易本義』

・本体としての先天易に根差すものとして義理易を考える。義理を交易する先天・本体により位置付ける。
・卜筮（ぼくぜい）を用いながらそれをどこまでも義理に結び付ける。

②『太極図説解』

・「陰陽」「五行」が既に用いられているが、これに「理」を結び付けまた「聖は学ぶ可きのみ」とする。
・特に「繫辞上伝」の「太極」をとくに立ち上げ、これにみずから「聖人」たるべき概念としてとくに「陰陽」や「理」を合一させていく。

５．漢文・和文の古学者たちの主張

(1) 伊藤仁斎（1627-1705）

［人物］

・京都町人、学者
・少年期より学、朱子学、三十代における鬱病・閉じ籠もりと精神体験
・活物観と日常生活の普遍性を説く。４０代に結婚、東涯（1670−1736）は第一子、優秀。

［各テキストの分類・歴史］

・漢代・古代に遡り、論孟を孔子像と共に強調する。

詩・書・易・春秋［四経］　論語・孟子［語孟］　漢儒學問　　隋唐諸寿学　　宋周程張李学　　朱子学
礼（中庸）

（仁斎『語孟字義』『童子問』、東涯『古今学変』等による）

「唐虞三代」と春秋戦国における「邪説暴行」
論語・孟子等による「堯舜祖述、文武憲章」「立教」
宋儒による仏道等影響下での「偽」なる学の展開

［内容］

・「三代」（夏・殷・周）と「易」は持続する。
・最初、太極図を用いたが、その後、用いなくなる。
・理より気、詩書を重んじる。「活物」としての気、原理ではなく個別理。対自的認知としての孔孟。
・活物観における天道・天命。「人倫日用」の強調その位置・視野をもつものとしての聖人の強調。

(2)荻生徂徠（1666-1728）

［人物］

・流離の流れと思想の原型的体験、
江戸　→　南総　→　江戸(市井)　→　仕官 ／御用　→ 上昇 → 市井(文化市場) ／御用
風俗は不変的ではなく変容し形成されるもの、聖人による作為その学習による治としての礼楽・政治。

［各テキストの分類］

・易・詩・書・礼楽［四教］　論語・孟子・荀子　漢儒　　隋唐
・漢文に対して、和文による翻訳の大事さを説く。

［内容］

・天地を、完全には把捉できない不可測をもつが、包摂するある程度の構造がある、として活物観と共に捉える。
・「聖人」を仁斎と同様に強調するが、日常性からさらに礼楽刑政を示し「信」を説く。
・理の個別性と、術・技を強調。
・実際の京都の王朝は、殷代からの継承さだと捉える。
↓
・さらに、聖人・作為・翻訳論を解体し秩序の中心性を神道とすれば、宣長等の国学を準備することになる。

(3)本居宣長（1730-1801）

[人物]

・伊勢の人、京都で堀景山（徂徠と交流）に学ぶ
・さらに賀茂真淵など多くの学者を学ぶ、国学。

[内容]

・秘伝を批判し、歌を始めとして公共化、出版。
・『古事記伝』、直毘霊、
・万世一系の天照系統への依存の主張。武家の天皇への結び付きをはっきり準備する。
・漢心批判、大和心強調。

６．幕末から近代へ

(1) 後期水戸学

会沢正志斎（1782−1863）、藤田東湖（1806−1855）

(2)横井小楠(1809-1869)

『国是三論』、天地公共有生の心、→由利公正（ゆりきみまさ 1829−1909）

(3)五箇条の誓文と宸翰

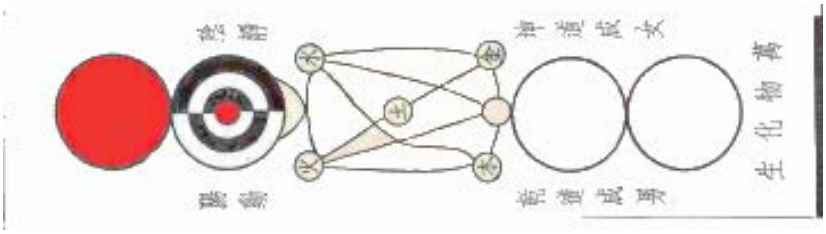
(4)教育勅語 1890M23 発布・大日本帝国憲法 1889M22 公布、1890M23 施行

・中村正直（18321891）、易、天地人観をとらえる。
・勅語・大日本帝国における「朕」

万物之靈、易有太極、太極図、太極図説、太極図説解

『尚書』泰誓篇上
「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」 → 「人は万物の霊」

『易』繫辞上伝
「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶 吉凶生大業」
→「易に太極あり、これ両儀を生じ、両儀は四象を生じ、四象は八卦を生ず。八卦は吉凶を定め、吉凶は大業を生ず」



From Wikimedia Commons

『太極図説』北宋の儒者・周敦頤 (1017-1073)、← 朱熹『太極図説解』＊ (岩波文庫 33-219-1 pp.21-31 より)

「無極而太極。太極動而生陽。動極而靜。靜而生陰。靜極復動。一動一靜。互爲其根。分陰分陽。兩儀立焉。陽變陰合。而生水火木金土。五氣順布。四時行焉。五行一陰陽也。陰陽一太極也。太極本無極也。五行之生也。各一其性。無極之眞。二五之精。妙合而凝。乾道成男。坤道成女。二氣交感。化生萬物。萬物生生。而變化無窮焉。惟人也。得其秀而最靈。形既生矣。神發知矣。五性感動。而善惡分。萬事出矣。聖人定之。以中正仁義。聖人之道。仁義中正而已矣。而主靜。無欲故靜。立人極焉。故聖人與天地合其德。日月合其明。四時合其序。鬼神合其吉凶。君子脩之吉。小人悖之凶。故曰。立天之道。曰陰與陽。立地之道。曰柔與剛。立人之道。曰仁與義。又曰。原始反終。故知死生之說。大哉易也。斯其至矣。」

「無極にして太極。太極動いて陽を生じ、動くこと極まって静かなり。静かにして陰を生じ、静かなること極まって復た動く。一動一静、互いに其の根と為り、陰に分れ陽に分れて両儀立つ。陽変じ陰合して水火木金土を生じ、五気(水火木金土)順布し四時行はる。五行は一陰陽なり。陰陽は一太極なり。太極は本無極なり。五行の生ずるや、各々其の性を一にす。無極の真と二(陰陽)五(水火木金土)の精と妙合して凝る(形づくる)。乾道は男と成り坤道は女と成り、二気交感して万物を化生す。万物は生生して変化窮まること無し。」
「惟だ人のみは其の秀でたるを得て最も霊なり。形既に生じ、神発して知る。五性感動して善悪分れ、万事出づ。」＊1
聖人は之を定むるに中正仁義〔聖人の道は仁義中正のみ。〕を以てし、而して静〔欲無きが故に静〕を主として人極を立つ。故に聖人は天地と其の徳を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合す。」
「君子は之を修めて吉なり、小人は之に悖(もと)って凶なり。」＊2
「故に曰く、天の道を立てて陰と陽と曰ひ、地の道を立てて柔と剛と曰ひ、人の道を立てて仁と義と曰ふ、と。又曰く、始めを原ねて終はりに反る、故に死生の説を知る、と。大なる哉易や、斯れ其の至れるなり。」

＊1此れは、衆人は動静の理を具ふるも、而も常に之を動に失ふことを言くる也。蓋し人物の生ずるや、太極の道有らざること莫し。然れども陰陽五行の気質交はり運つて、人の稟(う)くる所のみ独り其の秀でたるを得たり。故に其の心最も霊たり。而して(霊たる)以(ゆえ)に其の性の全きを失はざる有り、所謂天地の心にして人の極也。然るに形は陰より生じ、神は陽より発し、五常の性物に感じて動き、陽善と陰悪と又類を以て分れ、五性の殊(わか)ちあるもの散じて万事と為る。蓋し二気五行の万物を化生するに、其の人に在る者又此の如し。(ただ)聖人の、太極を全く体して以て之を定むること有るに非ざるよりは、則ち欲動き情勝ち利害相攻め、人極立たずして禽獣を違ること遠からざるなり。

＊2聖人は太極の全体にして、一動一静適(ゆ)くとして中正仁義の極に非ざるは無し。蓋し修為を假らずして自から然る也。未だ此に至らずして之を修むるは、君子の吉なる所以也。此れを知らずして之に悖(もと)るは、小人の凶なる所以也。之を修むると之に悖ると、亦敬(つつ)しむと肆(ほしい)ままなると、の間に在るのみ。敬しむときは、則ち欲寡くして理明かなり。之を寡くして又寡くし、以て無(欲)に至るときは、則ち静にして虚(むな)しく動いて直(ただ)し。而れば聖は学ぶ可きのみ。

■五箇条の誓文と宸翰

五箇条の御誓文

一　廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ
一　上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ
一　官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ　人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス
一　舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ
一　知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ
朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ天地神明ニ誓ヒ大
ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ
立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ
　慶応四年三月十四日　御諱

勅意宏遠誠ニ以テ感銘ニ不堪今日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ベカラズ臣等謹デ　叡旨ヲ奉載シ死ヲ誓ヒ黽勉從事冀クハ以テ　宸襟ヲ安ジ奉ラン
　慶應四年戊辰三月　　總裁名印
　　公卿諸侯各名印

御宸翰(しんかん、自筆書)**――億兆安撫国威宣揚の宸翰**(おくちょうあんぶこくいせんようのしんかん)

朕幼弱を以て律に大統を紹ぎ爾来何を以て萬國に對立し列祖に事へ奉らんと朝夕恐催に堪へざるなり
竊に考るに中葉　朝政衰てより武家権を専らにし表は　朝廷を推尊して實は敬して是れを遠け億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能はざるやふ計りなし
遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果其が為に今日　朝廷の尊重は古へに倍せしが如くにて　朝威は倍衰へ上下相離るゝこと霄壤の如しかゝる形勢にて何を以て天下に君臨せんや
今般　朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其處を得ざる時は皆　朝が罪なれば今日の事　朕自身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立古 列祖の盡させ給ひし蹤を履み治蹟を勤めてこそ始て　天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし
往昔列祖萬機を親らし不臣のものあれば自ら将としてこれを征し玉ひ　朝廷の政總て簡易にして如此尊重ならざるゆへ君臣相親しみて上下相愛し德澤天下に洽く國威海外に輝きしなり
然るに近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り獨我國のみ世界の形勢にうとく舊習を固守し一新の效をはからず
　朕徒らに九重中に安居し一日の安きを偸み百年の憂を忘るゝときは遂に各國の凌侮を受け上は列聖を辱しめ奉り下は億兆を苦めん事を恐る故に　朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ列祖の御偉業を繼述し一身の難難辛苦を問はず親ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂には萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置んことを欲す汝億兆、舊來の陋習に慣れ尊重のみを　朝廷の事となし
神州の危急をしらず　朕一たび足を擧れば非常に驚き種々の疑惑を生じ萬口紛紜として　朕が志をなさゞらしむる時は是れ　朕をして君たる道を失はしむるのみならず從て列祖の天下を失はしむるなり汝億兆能々　朕が志を躰認し相率て私見を去り公義を採り　朕が業を助て神州を保全し列聖の神靈を慰し奉らしめば生前の幸甚ならん

右
　御宸翰之通廣く天下億兆蒼生を思食させ給ふ深き
御仁恵の　御趣旨に付末々之者に至る迄敬承し奉り心得違無之 國家の為に精々其分を盡すべき事
　三月　　總裁
　　補弼(ほひつ)